

著 みやも
画 ぶし



女神のつくった世界の片隅で

従魔ゆるゆる 生きていきます

CONTENTS

Juuma to yuruyuru
ikite
ikimasu

◆ 第1章 ◆

手仕事と異世界暮らし

007

◆ 第2章 ◆

滲みと呪い

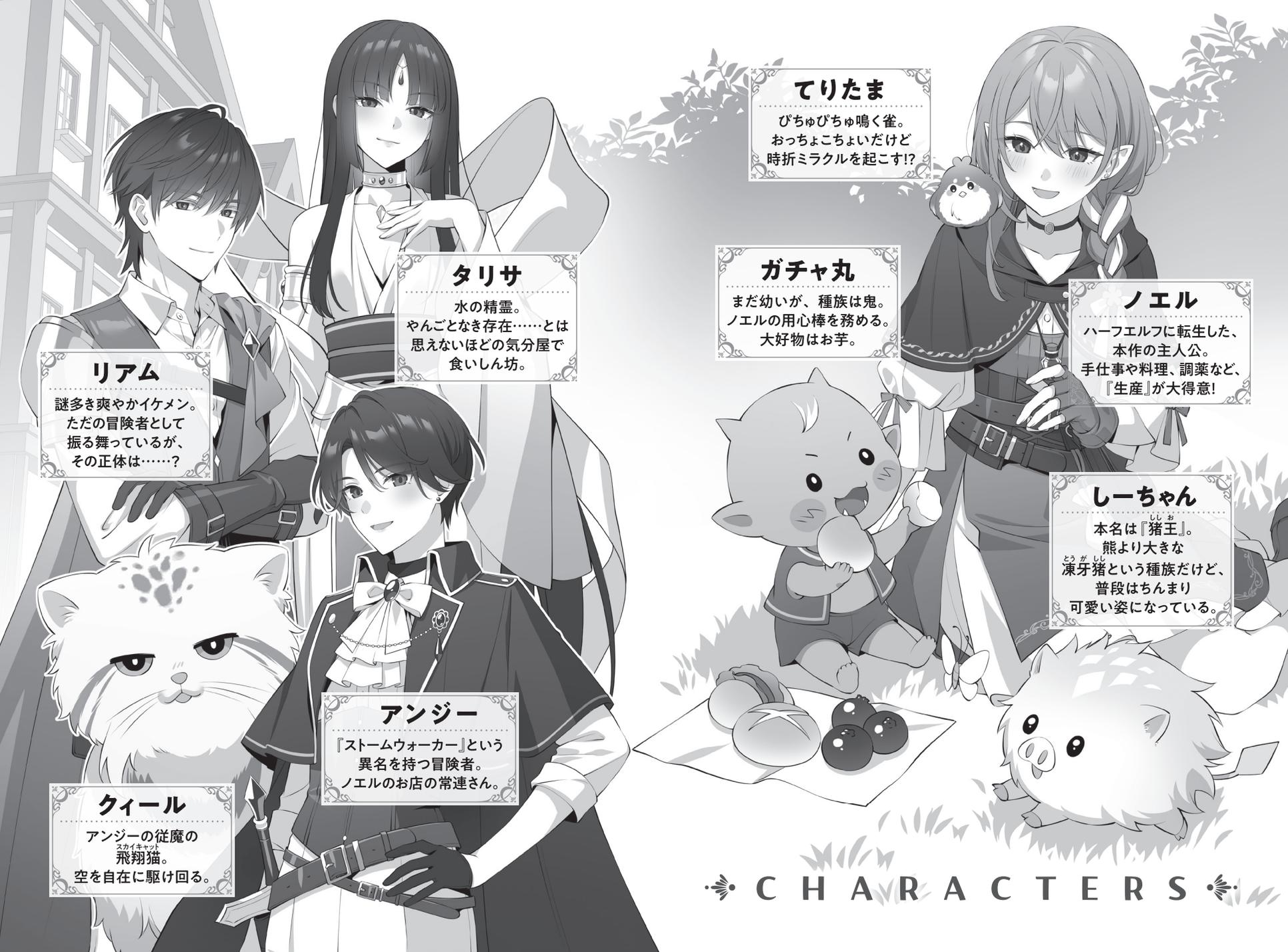
131

◆ 番外編 ◆

紅玉火炎酒

261





リアム

謎多き爽やかイケメン。
ただの冒険者として
振る舞っているが、
その正体は……？

タリサ

水の精霊。
やんごとなき存在……とは
思えないほどの気分屋で
食いしん坊。

アンジー

『ストームウォーカー』という
異名を持つ冒険者。
ノエルのお店の常連さん。

クィール

アンジーの従魔の
スライキヤード
飛翔猫。
空を自在に駆け回る。

てりたま

ぴちゅぴちゅ鳴く雀。
おっちょこちょいだけど
時折ミラクルを起こす!?

ガチャ丸

まだ幼いが、種族は鬼。
ノエルの用心棒を務める。
大好物はお芋。

ノエル

ハーフェルフに転生した、
本作の主人公。
手仕事や料理、調薬など、
『生産』が大得意!

しーちゃん

本名は『猪王』。
熊より大きな
凍牙猪という種族だけど、
普段はちんまり
可愛い姿になっている。

第 1 章

手仕事と
異世界暮らし



Juuma to yuruyuru
ikiteikimasu

はじまり 朝の箱庭にて

東の空がほんのりと白み始める頃、鳥たちのさえずりが微かに聞こえ始め、冷たく澄んだ空気の中に春の息吹がそとと混じる。足元の土はしつとりと夜露を含み、畑の作物に残る朝露がまだ薄い朝日に照らされ、一瞬のきらめきとともに落ちていった。

温んだ黒土の匂いを胸いっぱい吸い込み、室内に吊るしていたハーブの束を、私——ノエルが営むお店『魔法のハーブガーデン ノエル』の軒先に移動する。

そして、店内に入ると冷えた体をホットミルクで温めた。

それから鍋を取り出して湯を沸かし、ジャガイモを茹でていく。

少しして火が通ったのを確認してから、ジャガイモを大きなお皿に盛る。

「さて、できたわ。今朝のメニューは、たつぶりのジャガイモ！」

そんな私の言葉に反応して、カウンターの下から、びよこつと丸い頭が覗いた。

目をキラキラさせながら飛び出してきたのは、我が家のちびっこ武術家『ガチャ丸』。ゴブリンから進化した鬼だ。

まだ子供だけど、その小さな体のどこにそんな力があるのかってくらい強くて頼りになる子で、今日も朝から元気いっぱい。

蒸かしたジャガイモにバターをたっぷり載せて差し出すと、両手で抱えて頬張る。

そして、毎度おなじみの『おいちいポーズ』。体をぐっと縮こまらせて、片方の拳を頬に近付けた。

にんまりとした笑顔で、全身を使って幸せを表現してくれるのがたまらなく可愛い。

「しーちゃんは……あ、もうお皿空っぽだ」

足元では、小さな白いウリ坊の『猪王』——通称『しーちゃん』が、鼻先をちょこんと上げて、満足そうにコロンと横たわっていた。ふすう……という鼻息と一緒に。

どうやら食べすぎてお腹がパンパンらしい。

そんな彼だけど、侮ることなかれ。

普段はこんなにちんまりしているけれど、いざという時は、熊よりも大きな本来の姿、凍牙猪の真骨頂を見せてくれる、うちの守り神だ。

でもその姿のままだと、おうちの梁が折れちゃうからね。本人(?)もそれはわかっているのか、おうちの中ではずっとこの『可愛い仮の姿』でいてくれる。

そして——

「ぴーちゅぴーちゅぴー!!」
抗議するように鳴きながら羽音を立ててやってくる、高速飛行物体。

「起こしても起きなかつたでしょー」

ちよつと遅れて登場したのは、我が家のポンコツエース『てりたま』。

艶々の羽にコロんとした卵型のフォルム。だから、てりたま。

小柄な雀型のモンスターで、気合いだけはいつも一人前。でもだいたい、ちよつとしたドジを踏む。

そして、なぜか羽の間からいつも焼きたてのパンの香りがする。ナゾ。

今日は、慌てて飛んできたせいで、勢い余ってバター皿に顔面ダイブ。

そのまま数回バウンドして、テーブルから床へズザッと豪快に着地した。

すぐにバサバサと立ち上がって、何事もなかったかのように胸を張っているけど、頭にはしっかりとジャガイモの皮が載ったまま。

ガチャ丸が「ギャギャツ」と噴き出して、しーちゃんが「ぶぎい」とため息を漏らす。

「もう、てりたまつたら……。ほら、おいで。お顔、拭いてあげるから」

私は柔らかな布で、てりたまの小さくふわふわなお顔を拭いてあげる。

そうして綺麗になつてりたまは、「ちゅぴー」と短く鳴いて、ぺたっと私の肩に乗ってきた。

その重みが、心地いい。

少し高いてりたまの体温を右頬に感じながら、ふと思う。

こんな風に『居場所がある』って、なんて幸せなことなんだろう。

朝食を食べ終えたら、お店を開ける準備だ。

いつものように、棚の埃をそつとぬぐい、ガラス瓶のラベルが曲がついていないかを一つひとつ確かめていく。

この小さなお店の空気を整える時間は、私にとって朝の瞑想のようなひと時だ。

店はとて小さい。

元々は石造りの古い倉庫を、自分の手で少しずつ直していつてお店にした。棚を組み、床に絨毯を敷いて。後にバックヤードを増築したけれど、店舗スペース自体はあの頃と変わらない。

けれど、このこぢんまりとした空間だからこそ、こうやって商品を丁寧に並べることができるのだと思うと、なんだかいい。

『少しずつ、できる範囲で』。それが、ここでの暮らしと商いのモットーだ。

ちなみにこのお店の商品は、全て私が自然のものを加工して作ったもの。

カウンターには、採れたて野菜を使った『塩干し肉のサンドウィッチ』と『お野菜スコーン』。

棚には、『夜行茸の腰付けランタン』や『ハーブの手仕事軟膏』『瓶詰の飴』など、脈絡はないけれど、手仕事をぎゅつと詰め込んだ品々が静かに並んでいる。

『助かったよ』『いい香りだったよ』……そんな言葉を思い出すたびに、ああ、喜んでもらえてるんだなって実感する。その気持ち、何より嬉しい。

心にじんわり染みるような感動がある。

そんな思いを一つひとつ確かめながら過ごす静かなこの時間が、私はとても好きだ。

私は、ふと思う。

三年前の私だったら、こんなことを考えなかっただろうな——と。

実は、私は三年前まで、別の世界で生きていた。

それからこの世界《アストレイリア》に来て、私は大分変わったように思う。

アストレイリアは、人気VRMMOの舞台だった。

私が毎日生きるように遊んでいた、『女神の箱庭』というソフトのね。

リリースから十年。

毎日のように誰かのプレイ動画がバズっていた。

自由度もプレイ人口も、全てが当時のVRMMOソフトの中でトップクラス。

名実ともに『不朽の名作』だった。

私にとってはそのゲーム内の世界が——『生きる居場所』だったの。



母が再婚したのは、私がまだ思春期にも入っていない頃だった。

再婚相手は『先生』という立派な肩書きを持つ人で、母はその人と新しく家庭を築きたかったの
だろう。

けれど、その新しい家のどこにも私の居場所はなかった。

そんな日々を過ごしてきたせい、私はいつも心のどこかに孤独を抱えたまま、一人で生きてきた。

だから、希望を見つけたあの日のことは、今でもよく覚えている。

仕事帰り、目に飛び込んだのは、ビルの電光掲示板に映るファンタジーゲームのCM。

絵本のような世界を、小さな動物たちが無邪気に駆け回っていて——

私は、気付けばそのビルの一階のゲームコーナーで端末とソフトを買っていた。

それが女神の箱庭との出会い。

そして、箱庭の中で寂しかった私の心を埋めてくれたのは、他でもないこの子たちだった。

ゲームの中で出会って、育てて、ずっと一緒に戦ってきた従魔。姿形は違うけれど、どの子も本当に可愛くて、たまらなく愛おしくて。

だからどれだけ忙しくても、私は必ずログインした。

そこには、大切なあの子たちが待っていたから。

だから突然のサービス終了の告知を受けた時は、まるで雷に打たれたようだった。

急に終わるなんて、あんまりだよ。

そう思いながらも私は最後の夜、覚悟を胸にログインした。

お別れの晚餐は、みんなの好きなものを並べて、精いっぱい笑顔で見送るって決めていた。

パンも焼いたし、スープも煮込んだし、大好物の焼き芋も山盛り用意した。

みんなの顔がちゃんと見えるようにたくさんの灯りを並べて――

「……これで、最後だね」

そう言った瞬間、みんながこっちをじつと見つめていて、その顔を見たら、もう、耐えられなかった。

「……離れたくないよ……っ。こんなの、嫌だよ……っ！」

わんわん、声を上げて泣いた。

しゃくり上げながら、誰かにしがみつくように、泣いて泣いて泣いて……

どれくらい泣いていたんだろう。

突然、画面が真っ白になって……

「あ、キックされた……」

ログイン制限の時間か、最後の強制切断か。

絶望が喉元までせり上がった、その時だった。

「アストレイリアを、そこに住まう生き物を、こんなに愛してくれてありがとうのう。この星を創り上げた儂の孫娘も、お主のような者が星に住まうことを心から歓迎してくれるじやろうて」

どこからともなく、柔らかく響く老いた声が聞こえてきた。

……え？ 誰？

目の前の霧の中から現れたのは、金色の光に包まれた、不思議なお爺ちゃんだった。

その人が、というか、その存在が、今では私が毎日お祈りしている『創造神様』だったなんて、

あの時はまだ、全然理解できてなかった。

創造神様は、女神の箱庭の秘密を、話してくれた。

女神の箱庭は、ただのゲームなんかじゃなかった。

実はそれは、現実存在する惑星アストレイリアを模した、壮大な模擬世界だったのだという。その星は、女神アルシエナが愛をこめて創り上げた、美しく豊かな世界。

けれど、彼女に偏愛を抱き、創造した星にすら嫉妬した男神がいた。その神は、やがて邪神となり、呪いを以てアストレイリアを侵した。

それは少しずつ地表に『滲み』として漏れ出し、各地に異常や災厄を引き起こし始めている。

女神アルシエナは地中深くでその身を削りながら、呪いの侵食を抑えていたんだけど、力を使いすぎて、今や消滅寸前——

本来なら、この事態に備えて、ゲームの最高レベル帯に達したプレイヤーの中から、戦士を選抜してアストレイリアに降ろす計画だったらしい。

つまり、あのゲーム自体が、邪神に抗う適性のある者を育てる装置——節だったのだ。

だけど、泣きながら従魔たちを抱きしめていた私を見て、創造神様は言ったの。

「……なんとも珍しい。戦う者ではなく、愛する者か。試してみるも一興じゃな」

そうして創造神様は私に声をかけたんだって。

その後私は同じく創造新様に選ばれた人たちを運ぶ『転生の箱舟』と呼ばれる舟に乗せられ……このアストレイリアの片隅にある小さな農地で目を覚ました。

驚いたことに、そこには見覚えのありすぎる風景が広がっていた。

そっくりそのまま私が十年かけて育て上げた農場と施設、それに小さなお店までもが完全に再現されていたの。さらに、晩餐の席に座っていたあの子たち——大切な従魔たちも全員いた。

パンの焼ける香りも、スープの湯気も、たくさん用意した灯りも、何もかもがゲーム最終日のまま。

嘘みたいな現実には、私はまた大泣きしてしまった。

でも、それは悲しみの涙じゃない。

嬉しくて、嬉しくて、どうしようもないくらい——心の奥から溢れてきた、嬉し涙だった。



あれから、今日でちょうど三年かあ。

ゲームをやっていた時は、私は商売にも人との交流にも興味がなかった。そう考えると、本当に変わったと思う。

かつてこのお店は、商品と金銭の交換が自動で行え、防犯機能もついている『自動販売システム』を使った無人販売でしか運用していなかった。

だからかもしれないけど、商品が売れたとしてもなんの感慨もなかった。

そもそもこのお店を始めたのは、商売がしたかったわけじゃなくて便利アイテムである『時間停止チェスト』がどうしても欲しかったからだ。一度入れたものの時間を止めて、劣化や腐敗を防い

でくれるそのチェストの購入可能数が、店舗登録をしないと増やせなかったという事情があつてね。だから店舗運営はいわば手段でしかなかったし、商売にも人との交流も利益上の数字も、心に響かなかつた。

でも、この世界で本当に生きていくようになった時に、私は『ちゃんと人と心を通わせたい』って思つたの。

ゲーム世界では、相手はアバターで、だからどれだけ他人と交流しても虚しいだけだと思つてた。でも、ここで私は第二の人生を始める——そう思つたら、温もりが欲しくなつた。

そうしてお店に立つようになり——実際に人がやってきて、私の作ったものを手に取り、使つてくれるのを自分の目で見えるようになった。

そして『ありがとう』と言われた時、私は初めての感覚を覚えた。

目の前の人が、嬉しそうに微笑んでくれる。

その光景が、なんだかとても不思議で、でも悪くなかつた。

売ることで、誰かと繋がる。

喜ばれることで、自分の暮らしに意味が生まれる。

そんな実感が、今の私の生き甲斐に繋がっている。

そう考えながらも手を動かしていたら、棚の整頓が終わつた。

次に気になるのは、畑とハーブガーデンの様子。

ぷつくり育つたサヤエンドウが陽の光を浴びてサラサラと揺れ、ハーブたちは小さな花穂を膨らませている。

そろそろ、収穫しちやおうかな。

でも、今日は夜にあれが採れる日。

限られた時間にしか姿を見せない、とっておきの素材。

チャンスは今夜だけ。そうと決まれば、早めにやることを済ませておかないと！

1 粒立アロエとホットケーキ

今夜は、春の満月。

この夜を逃すと、採取に一年待たなければならぬ特別な実がある。

『粒立アロエの実』——それは、春の満月の光を浴びて育つ、白く輝く五芒星の実。

一晩だけ実をつける、甘い露のような果実。

とろみのある甘い果肉はどんなスイーツにも合うし、ジャムにしても最高に美味しい。

せっかくなら、ふわふわのホイップと合わせて『春の夜空ジャムサンド』なんて名前で出してみようか……

そんなことを考えながら、足取り軽く森へ入る。

もちろん、メンバーは私と従魔全員。

この子たちが一緒にいれば、大抵のモンスターは近付いてこない。それに、私は自分の戦闘力にはあまり自信がない。

ゲームの時と違って体力ゲージなんて見えないし、現実の体で戦うとなれば、怪我だって普通に怖い。

いくらスキルがあるとは言え、走れば息は上がるし、転べば痛い。

そんな当たり前のことが、この世界では逆に身に染みて感じられる。

だからこそ、私にはこの子たちの存在が本当にありがたくてたまらない。

私よりずっと力があって、ずっと警戒心も強くて、どんな時でも周囲の気配を敏感に察知してくれるんだから。

森の中で風が変わっただけで、耳をびくりと動かししてくれるその姿に、どれだけ安心させられたかわからない。

前に出て私をかばうように立つその背中が、どれほど心強く見えたことか。

頼りになるなんて言葉じゃ足りないくらいに、私はこの子たちに守られている。

そして、そんな彼らが私の隣を歩いてくれるからこそ、私は今日もこうして森へと足を踏み入れられるのだ。

とは言え、この森に限って方が一はないと思うけど……

だって、ゲーム時代、バスクオスカ平原とともにこのファイオの森は初心者フィールドって言われてたから。

得物のトンファー片手に森に睨みをきかせるガチャ丸。

「いつもありがとうね」と声をかけて頭を撫でると、片手を上げながらクールに返事をしてくれた。きつとボディガードのつもりなのだろう。ほんつつつと可愛い!!

しいちゃんは通常サイズに戻って、私の歩幅に合わせてのっしのっしと歩いてくれている。

「しいちゃんもありがとうね」

「フゴ」って返ってきた。どういたしましてって言うてるのかな。

うちの愛されポンコツてりたまちゃんは夜なので、ポシエツトの中でスヨスヨ健やかにおやすみ中。

うん、起きてるより余程安心できるわ。

そして、元ウィスプ三姉弟の『ウノ』『ドス』『トレス』。彼らは道中の灯り担当。

この子たちは、ゲーム初心者だった頃、まだ雑魚除けの爆竹片手に素材採取していた時にタイムしたの。

ウノは『炎魚』に、ドスは『ボマー』に、トレスは『サラマンダー』に進化済み。

ちなみにボマーはまんまアニメに出てくるような爆弾フォルム。黒くて丸くて、頭に導火線までついている。炎魚はひらひらと炎をまとった魚。

そしてサラマンダーは炎を吐くトカゲだ。

「よろしくね！」

「♪♪♪」

夜行性の草花が、微かな光を帯びながら囁くように揺れる。

そんな、道とは呼べぬ道を、私は従魔たちとともに静かに進んだ。

しーちゃんが前を歩き、ガチャ丸が右へ左へ警戒の目を配り、ウノたちはフヨフヨと灯りで足元を照らすように空中をゆったりと泳ぐ。

おかげで、何の障りもなく、粒立アロエの群生地、森奥の沢へと辿り着いた。

「うん、うん。今年も豊作だね！」

そこには、静謐な満月の光と呼応するように、幻想的な景色が広がっていた。

放射状に広がる肉厚の葉の中心から、スタンドマイクのようにすっと立ち上がる茎。

その先には、夜空の星を模したかのように白く輝く五芒星の実が灯っている。

まるで沢沿い一面が、イルミネーションによって彩られているかのようだ。

(美しい……)

ちなみに名はアロエとついているけれど、見た目が少し似ているだけで、葉草としての効能も分類もまったく異なるという、この世界らしい、不思議植物の一つ。

私は掌にちようど収まるくらいの大きさの実を一つ握ぎ、そのまま一口齧った。

「ん〜美味しいっ！」

果肉は桃よりも柔らかく、舌に触れた瞬間とろける。

熟しきつたら・フランスのような……果実酒にも似た甘美な味わいに、頬が自然と緩んだ。

指の間から零れるほど蜜は瑞々しく、甘く、どこか月夜の冷気のような清らかさを含んでおり――

ガチャ丸も大喜びで頬張りながら「ギャッギャ」とはしゃぎ、しーちゃんは「プギプギ」と夢中で味わっている。

あれ、いつの間にかウリ坊サイズに縮んでいる。

でも、そうだよ。通常サイズだと、この実なんて金平糖ほどの大きさにしか感じないもんね。

一方、ウノ、ドス、トレスは実には見向きもせず、少し離れたところでひそひそとお喋りしてい



るようだった。

まあ仕方ない。彼らの好物は、果実ではなく可燃物だ。

「野生の火薬草があったら、そっちを食べておいで。ついでに、周囲の警戒もお願いね」
私の声を聞いて三匹はクルンと回って、悠悠月光の中へと散っていった。

腕ぎたてを十分に堪能したら、お持ち帰り用の収穫を開始。
目標はガチャ丸と私の背負いかごが満杯になるまで。

いくらゲームの頃と同じインベントリ機能を持っているとはいえ、過剰な採取はしないように心
掛けている。

ここはリアルな世界。採り尽くしていいことは一つもない。自然と共存していくための私の中の
ルールみたいなもの。

繊細な粒立アロエの実を、赤ちゃんの柔肌を包むようにそっと収穫していく。

……うん、今年も十分に採取することができたわね。

翌朝、早速採取してきた粒立アロエの実を加工することにした。

フレッシュな状態でも十分に美味しいから、加工してしまうのはちょっともったいない気もする
けど、素材がいいものは加工するとさらに美味しくなるのもまた事実。

ちなみに、この粒立アロエの実、フレッシュな状態では満月の浄化の力を宿していて、強力な解毒作用を持っている。

けれど、加工するとその性質が変わるのもこの実の面白いところ。
たとえば、ジャム。

粒立アロエの実を煮詰めると毒耐性の効果が表れるのだ。

このジャムをスコーンやパンケーキに添えて食べれば、食後しばらくの間、毒耐性バフが付く。

まあ、日常の食事で摂れる量だと弱毒耐性くらいにしかないけど、それでも旅や冒険の備えにはなる。

そして、ここからが一番大切なところ。

この薬効は、誰が作っても出るといわげじゃない。

粒立アロエの実に薬効を発現させるには、中級以上の『調薬スキル』と『薬膳スキル』を持っていないければならない。

スキルを発動させながら調理することで、素材に秘められた力を引き出せるのだ。

私はどうと、その二つのスキルに加えて『調理』スキルのレベルが最大。

だから、粒立アロエの力を存分に引き出すことができる。

逆に、スキルを持たない人が作ると、ただのとびきり美味しいジャムにしかない。

もちろん、それだけでも贅沢なごちそうではあるんだけど……

でも私はどうしても、薬効があるとわかってるものをそのまま調理するなんてもったいないと思ってしまう。

貧乏性というか、生産職のサガというか……ね？

そして何より、このアストレイリアという世界には、そんな秘めた力を持つ食材が、もう溢れかえるほど存在しているのだ。

それを全部無駄にしちゃうなんて、考えられないよね。

医食同源とはよく言ったものだけど、この世界では特にその傾向が強い気がする。

カテゴリーとしては食品であるにもかかわらず、薬としての効果も高い食材がごまんとあるのだ。そして驚くことに、それらの多くがただの食材としてしか認識されていない。

そんな素材たちが、私の手で、私のスキルで薬効を宿し、誰かを癒やし、誰かを助けることができる。

その実感も私をとても幸せにしてくれるのだ。

たとえ、目立つ冒険や派手な戦いもなくとも、こうして鍋の前に立ち、素材の力を引き出すことが、私にとつての「戦い」であり、「祈り」のようなものなのだ。

そんな思いを噛みしめながらぐつぐつと煮える鍋を見つめ、鍋底を優しくなぞるように、木べら

を動かす。

ゆっくり、ゆっくりと。

薬効が失われないように、丁寧^{ていねい}に火と時間を重ねながら。

「うん、ジャムはもういい感じ」

ふんわりと充滿する粒立アロエの甘い香りに釣^つられて、ガチャ丸たちが寄^よってきた。

てりたまは昨夜の採取の時、起こさなかつたことで拗^すねてた。でも……

「一口だけね」

そう言^いって、まだ湯^ゆ気が立ち上る鍋からジャムを一掬^{すく}いして小皿にとつてあげると「びちゅぴちゅ」とすぐに機嫌^{きげん}がなおつた。

チヨロいっ。

そして、ガチャ丸たちにも味見^{あじみ}をしてもらおう。

「グギャー！」

こちらを向きながらご機嫌^{ごきげん}で親指^{おやぢ}を立てるガチャ丸。

どうやら今年のジャムも上出来らしい。

一方^{一方}しーちゃんは、ジャムのなくなつた皿を見つめてしょんぼりしている。

「ささ、今からホットケーキ焼^やいてあげるから出来立てのジャムをかけて、朝ご飯^{あさごはん}にしましょ！」

その瞬間^{しゅんかん}、しーちゃんの瞳^{ひとみ}が輝^{きら}いた。

ガチャ丸も早々にテーブルにカトラリーを並べ始める。

この食^たいしん坊^ぼコンビめ。

小麦^{こむぎ}粉^{こな}、卵^{たまご}にミルク、溶^とかしバター、ベーキングパウダーに砂糖^{さとう}と塩^{しお}をひとつまみ。

しっかりと全てを混ぜ合わせてできた生地^{きじ}を、フライパンに置いた丸い型^{かた}の中に流し込んでいく。そのまま焦^こげないようにとる火^ひで十五分。ひっくり返して十五分。

今、私は昔^{むかし}ながらの分厚^{ぶんあつ}いホットケーキを作^{つく}っている。

現代^{げんたい}の軽^{かろ}やかな口^{くち}当たり^ありのパンケーキももちろん好き^すきんだけど、昔^{むかし}ながらのもつそりとした小麦^{こむぎ}香^かる喫茶^{きさ}店^{てん}風^{ふう}ホットケーキも捨^すてがたい。

前者^{ぜんしや}はデザートとしては申し分^{ぶん}ないけど、朝食^{あさめし}と考えるなら……つてことで後者^{こうしや}に軍配^{ぐんぱい}が上が^あつたのだ。

でも、どちらにせよ、ホットケーキやパンケーキの焼^やける匂^{にお}い^いって幸せ^{しあわせ}だよな。

ひっくり返^かすのを待つ間に隣^{りん}で粒立アロエのコンポートも作^{つく}っちゃおう。

柔らか^{なめか}い果肉^{こくじゆ}は熱^{あつ}を入れるとすぐにグズグズにな^なっちゃうので、大きくカットすることと火加減^{ひかげん}がポイント。

少量^{せうりやう}の砂糖^{さとう}と水^{みづ}とレモン汁^{じゆ}を加^くえて氣^きを付^つけながら十分^{じふぶん}煮^ゆて、浄化^{じゆわ}済^すみの魔封瓶^{まふうびん}にそーっと詰^めめ

ていく。

魔封瓶っていうのは素材から特殊な力が抜けないように付与を施した瓶のことで、ポーシオン瓶もそれにあたるんだけど、これは薬師ギルドに所属しないと購入できない。でも、薬師ギルドに所属しちゃうとポーシオンの納品義務が発生しちゃうから、私の場合は自家製魔封瓶を使っている。そのため付与スキルを磨いたようなもんだしね。

コンポートの果肉は、パイやタルト、シャーベットに。

シロップはというと、紅茶に砂糖の代わりにひとさじ加えたり、ゼリーにしたり、果実風味のジュースや自家製リキュールにしても美味しい。

私は、ポーシオンを飲みやすくするために甘味を付ける時にも使っている。

良薬は口に苦しだけど、甘い方が飲みやすいからね。

さて、ホットケーキもいい感じに焼き上がった。

表面はふんわり、こんがり、きつね色。

その上にバターをひとかけ。

さらに粒立ちアロエのジャムとまだ温かいコンポート、ホイップクリームをたっぷり添えて。

『山盛り粒立アロエのホットケーキ』完成！

朝からこんな背徳感^{はいどくかん}たっぷりの一皿を作ってしまった。

罪深い……でも、これを口いっぱい頬張っている時が、最高に幸せなんだよね。

テーブルにホットケーキを並べると早速ガチャ丸ががつく。

口元をクリームまみれにして、パンパンに頬張っている。

しーちゃんも「プギプギ」とご機嫌な様子でモリモリ食べているね。

てりたまは頭ごと突っ込んでもがいている。うん、いつも通り。

私も大きめに切ったホットケーキにジャムをたっぷりつけて、ちよつとはしたないけど大口を開けてパクリ。

んん〜っ!! やっぱホットケーキは口いっぱい頬張らなきゃ!

バター香るどっしりとした生地は、まさしく昔懐かしい喫茶店のホットケーキって感じ。そこにまったりと甘いジャムが絡み、口いっぱい幸せの暴風が吹き荒れる。

次はコンポートとクリームも載せて。

これもヤバイ!!

どこか懐かしさを感じさせる素朴^{そぼく}なホットケーキと繊細な粒立アロエコンポートとホイップクリームが見事に調和して、一段も二段も味わいが増してる!

ホットケーキと粒立アロエ、思ってた以上にすごい組み合わせ!!

加工品にしてジャムだけお店に出そうと思ってたけど、この完成度ならホットケーキとセットの

方がいいかも……？

よし、決めた！ お店の新作メニューは『山盛り粒立アロエのホットケーキ』にする。

こっちの世界に来てから、私のお店は少しだけ形を変えた。

小さいのは相変わらずだけれど、三席だけの飲食スペース——カウンター席を新しく設けたのだ。ここはかつて『初心者練習場』と呼ばれていた、『バスクオスカ平原』の手前。冒険者が行商人くらいしか通らない、土道沿いの辺鄙な場所だ。

それなのに、いや、それだからこそなのかもしれないけれど、いつの間にか、私の味を楽しみに立ち寄ってくれる常連さんができた。

わざわざ足を運んでくれる誰かがいるのなら、ちょっとくらい腰を落ち着けてほしいなと思って。それで、飲食スペースを設けてみたのだ。

顔ぶれはほとんど決まっているけれど、そのぶん名前も好みも覚えられるから、ちょうどいいのかもしれない。

その時——

カランコロンカラン。

店のドアベルが、軽やかな音を立てて鳴った。

そちらに視線をやると、アンジーさんが立っていた。

艶やかな赤髪を風に揺らしながら、凛とした表情で微笑む彼女は、この店の大切な常連さん。

よく見ると、背後にはふわふわと揺れる大きな毛玉——クイール君の姿も見える。

ライトグレーのもこもこ毛皮に、どっしりとしたクリームパンみたいな足。耳は丸く、瞳はアメジストのように澄んでいて、見た目はほとんどマヌルネコ。でも、虎サイズ。

いつ見てももふもふしていて眼福。ありがとう、クイール君。今日も最高です。

ちなみに、アンジーさんは有名な冒険者。

『ストームウォーカー』なんて異名を持つほどの実力者で、風を魔法で自在に操るそうさ。

しかも、クイール君もまた、空を駆ける力を持っていて、戦場では二人で風を巻き起こすんだとか。

うちに立ち寄る新人冒険者グループの子たちが、偶然鉢合わせた時に『あの人、アンジーだよね!?』『本物だ!!』って、まるで伝説のヒーローに出会ったみたいなのに、緊張と憧れが入り混じった目で見つめていたのを思い出す。

いいなあ、運動神経がある人って——なんて、つついっい羨んじやうよ。

ゲームとは言え、VRMMOでは本人の運動神経は攻撃系スキルの習熟スピードに関係してくる。私は、ハーフェルフの弓補正ありきでもレベルカンストまで五年かかった筋金入りの運動音痴。

そんな私からしたら、飛べるだけでかっこいい。その上、暴風で敵をなぎ払うなんて、私には逆

立ち上らなかつたのでできない。

そんなすごい人なのに、うちのお店にふらりと立ち寄って、気さくに話しかけてくれる。気取ったところのない素敵な女性だ。

冒険の話よりも、おすすめめのジャムやスコーンの焼き加減に目を輝かせるその姿は、風を駆る英雄というより、ご近所の素敵なお姉さんみたいで——それが、なんだか嬉しいんだよね。

「やあ、ノエル。またいつものをお願いできるかな？ それと、今日はいい匂いがするね」

ふわりと店内に広がるホットケーキの甘い香りに、アンジーさんが目を細める。

その隣では、クイール君がファンフンと鼻を鳴らしながら、ソワソワと落ち着かない様子。

「新作なんですよ。食べていけますか？」

「新作か。それはラッキーだ。ぜひ、私とクイールの分をお願いしよう」

そう言うアンジーさんに頷いて、私は店の奥へホットケーキといつものを用意しに向かう。

甘く焼ける香りの中、ふと——アンジーさんと初めて出会った日のことを思い出す。



あれはまだ今よりも少し肌寒かった頃。

私、裏の雑木林で見つけたのよ！ マタタビ（たぶんそのものじゃなくて、近縁種だけど）を。

それを、なんとなく干してみたら、すっごくいい香りがした。甘いミルクとバナナの中に、ほんの少しハーブの清涼感があるような。

マタタビなのに人にも良さそうって思って、おふざけ半分で軟膏クリームにして——伝説の(?)『やごろクリーム』第一号が完成した。

そして、事件はその日の午後に起きた。

ガシャーン!!

「え、ちよ、ちよっと!? 何この音!？」

音がした方に目を向けると、窓際の木製の棚が、見事に吹っ飛んでいたんだよね。

その中心にいたのは……ト、ト、トラ!?

いや、よく見たら、巨大な猫!

マヌルネコみたいな見た目の丸っこいその子は、目を爛々と輝かせて、にやごろクリームの瓶に鼻を押し当てていた。

もう、プチパニック。

私はアワアワと動くことができず、従魔たちが構えたその時——

「すまないっ!! こらっ、クイール! どうしたんだ、急に!!」

風のように現れたのが、アンジーさんだったの。

真っ赤な髪がばさつと揺れて、猫を叱りながら駆け寄ってくる姿。

ああ、この人、冒険者さんだ。しかも、強い人の気配がする。

そう直感でわかったのを、今でも覚えてる。

クイールと呼ばれたその猫——もとい飛翔猫スカイキャットがしょんぼりと耳を伏せてる横で、アンジーさんは頭を下げてきた。

「本当にすまない。こんなことは初めてだ。これは君の手作りかい？」

そう言っつて、アンジーさんは例のにやごろクリームを手を取った。

そして少し笑って、こう言ったの。

「……すごくいい香りだ。それにクイールが飛びつくほど夢中になるのだから、きつといい品なのだろう。買わせてもらえないだろうか？ もちろん、クイールが壊してしまった物も全て弁償べんしょうさせてほしい」



それから何度か訪れるうちに、ちよつとずつ、距離が近くなって。

今では、毎週のように立ち寄ってくれる常連さんになったってわけ。

私と、この小さな店にとって、とても大事なご縁の一つだ。

「お待たせしました。山盛り粒立アロエのホットケーキです」

アンジーさんの前に、コトリと皿を置く。

差し出されたホットケーキを見て、アンジーさんは目を丸くしている。

フフフ、そうでしょうそうですね。

ホットケーキの香りと見た目は暴力的と言ってもいい。

溶けるバター、たっぷり載った粒立アロエジャムにコンポート、クリーム。

女子なら絶対好きはず。

クイール君にも、バターとクリームたっぷりのホットケーキを出してあげた。

その瞬間、熱々にもかかわらずすごい勢いで食いついた。

さすがはネコ科。脂肪しぼう分大好きだね。

アンジーさんも恐る恐るホットケーキにナイフを入れ、ジャムとクリームを掬い取って口へ運

び——

「……っ!? 美味うまいい!!」

どうやらお気に召したようだ。

「初めての味だが、今までで一番美味しいよ。この、きつね色のホットケーキと言ったか？ その美味さもそうだが、添えてあるジャムやコンポート、これらは今まで味わったどの果実よりも美味しい。これはいつたい、なんの果実なのだ？」

アンジーさんは珍しく饒舌に感想を述べた。

それから一心不乱にフォークとナイフを動かし続け——完食。

さすが冒険者、なかなかの量を用意したつもりだったけれど、ちよつと足りなかったみたい。ひとまず、先ほどの質問に答えることにする。

「実はそれ、粒立アロエの実なんです」

「粒立アロエ……？ 私は薬草の類にはあまり詳しくないが、あれは確か、実をつけない植物のはずだが？」

「普通はそうなんですけど、特定の条件下でだけ、こうして実をつけるんですよ」

そう言つて、インベントリから新鮮な粒立アロエの実を一つ取り出して、見せる。

「……!? 空間収納……？」

アンジーさんが驚いたように目を見開いて何事か呟いたけれど、その声は小さくてはつきりとは聞き取れなかった。

綺麗だな、とかかな？

まあいいや。それより、おかわりを出してあげよう。

「いいのか!?」

目を輝かせてそう言つたアンジーさんは、そのあともくもくと手を動かし——

結局、分厚いホットケーキを合計三枚、ぺろりと平らげた。

クイール君はその倍の六枚。

ようやくナイフとフォークを置いた彼女は、少し頬を赤くしながらポツリ。

「……すまない。美味すぎて、つい食べすぎてしまった……」

その照れたような表情が、なんだかちよつと嬉しかった。

「いえいえ、むしろ美味しそうに食べていただけで嬉しかったです。そして——はい、にやごろくりーム、お持ちしました。アンジーさんのお好きな香りに調整しておきましたよ」

「わざわざすまない。それにしても、嬉しいよ。このクリームのおかげでどれだけ剣を振ってもまったく手が荒れなくなつたし、何よりこれをつけているとクイールが喜ぶ」

アンジーさんは微笑みながらクイール君を撫でる。

撫でられたクイール君はアンジーさんの手に、甘えるように顔を預け、リラククスして目を細めていた。

「ふふ、お役に立てて何よりです」

会計を済ませ、さてと、とアンジーさんが腰を上げたその時、店の外からあまり聞きたくない音がした。

バシャーン!! ぴ、ぴ、ぴちゅー……!!

「あー……………」

私はため息をつきつつ、視線をハーブガーデンの方へ向ける。

吹き抜けてくる春風には、まだ朝露の残る若葉の匂いが混じっていた。

石畳の小道の脇では、カモミールの絨毯がそよぎ、可愛らしい淡淡草の花が肩を寄せ合うように咲いている。

その奥には、低いレンガ壁に絡むように咲き誇るツルバラと、アーチに巻きついた紫煙花が、柔らかな木漏れ日の中で揺れていた。

煌びやかな蝶たちは、朝の巡回を始めたばかりで、ローレルの根元に咲く小さな清薫花の蜜に夢中になっている。

アンティークな白いフェンスの向こうでは、千輪花の蕾がほころび始め、奥には菜園を囲うように植えた防虫用のナスタチウムの橙が、爽やかなグリーンの中の灯りを点すかの如くボン、ボン、と咲き零れていた。

それはまるで妖精たちが踊りながら植えた悪戯のように、自然の流れで軽やかに咲き誇る幻想的

な春の庭。

そんなハーブガーデン脇のバードバスでバチャバチャと溺れるお餅のような鳥が一只。

「てりたまあ。足着くから。ほら、冷静になって」

小首をかしげて、キョトン顔のまま、冷静になってスクツと起き上がるそのお餅。

バードバスで水浴びしていたら楽しくなってスクテンコロリン。焦って立ち上がりうとしてまたスクテンコロリン。大方そんなところだろう。

私はそつとてりたまをタオルでくるんで抱き上げる。

「ほんとにもう……元気なのはいいけど、水遊びは近くに誰かいる時じゃないとダメよ?」

もそもぞとタオルの中で動きながら、「ぴちゅー……」と情けない声が聞こえた。

反省してるのか、甘えてるのか……たぶん両方。

アンジーさんがその様子を見て、肩越しに笑った。

「初めて会った時からクイールに怯えないのも不思議だったが、さらにこんなどんくさいとは。朝から和ませてもらったよ」

目の端に涙を溜めてクツクツと笑うアンジーさんに、なぜかエヘンと胸を張っているてりたま。

……褒められてないから。

「この子、臆病なわりに、鈍いんですよ。間抜けなほどに」

けれど、この子がいてくれることで、どれだけ癒されてきたか。

「そうだ、今日はクリームを受け取りに来ただけじゃなくて、もう一つ、伝えておきたいことがあるんだ」

キリリと表情を正したアンジーさんの声に、ふっと現実に取り戻される。

腕の中でてりたまが「びちゅ」と小さく鳴いた。

「王都の外れ、北の城壁を越えた先の農村で滲みが出た」

私は息を呑んだ。

滲み、それは邪神が齎すこの星への呪い——

呪いは瘴気となり、人を、土地を、動物を、植物を侵す。

「ギルドが動いたのは昨日。感染モンスターの調査と処分。私はその特別依頼へと向かうところだったんだ」

「アンジーさんが？ 一人で？」

「平気さ。現地では他のランカーも合流する。その中にはリアム殿もいるから安心するといい」

アンジーさんは、あくまで軽やかな口調で言う。けれど、その目は真剣だった。

「ここからだと言距離もあるし、このあたりに影響が出ることはまずないが、気を付けておくように、と、それが言いたかったんだ」

私はこくりと頷いた。

「ありがとう、アンジーさん。気を付けて……。無理はしないでくださいね」

「ああ、帰りにはまたホットケーキを食べに戻ってくるよ」

そう言って、軽く片手を振り、クイール君に跨って風のように去っていった。

私は立ち尽くしたまま、ふと空を見上げる。

青空の向こうで、風が、静かにうねり始めている気がした。

2 黄金芋の依頼

翌朝。

昨日の余韻がまだ心に残る中、目覚めた。

窓の向こうは、まぶしいほどの晴天。

まるで昨日の不安を吹き飛ばすかのよう、清々しい春の風がそよいでいた。

私の住む国ネイブルナルの春は、淡い香りとともに静かに幕を開ける。

霜の消えた大地が緩んで、温もりに誘われた草木たちが競うように芽吹き始めるのだ。

かつて都会で暮らしていた頃には気付きもしなかった春の土の匂い——それが今では、私の大好きな香りの一つになった。

でも、この季節はうかうかしているとおつという間に過ぎ去ってしまふ。

新緑が芽吹くと、花々は次々に鮮やかさを増し、やがてその儂い輝きが風に溶ける頃にはもう初夏の薫りが満ちている。

アストレイリアには地球同様、四季が存在する。熱帯地域や極地には存在しないけれど、ネイブルナルはそうではない。

基本的にアストレイリアならどの季節も好きだけれど、とりわけ春は別格に美しい。

木々は競うようにパステルカラーに染まり、花々は豪華絢爛に咲き乱れ、夜には夜行性の草花が淡く光り、その姿はまるで星屑を地に零したよう。

女神がこの星に心奪われるのも納得の美しさなのだ。

けれど、美しさにばかり気を取られているわけにはいかない。

春は仕事が盛りだくさんだから。

畑の土を起こして、春野菜と葉草を植え付ける。

これだけでもあつという間に時間が過ぎるのに、今しか摘めない花々や、魔力の満ちた早春の実を採りに行くとなれば、一日じゃ足りない。

でも、そんな毎日が少しも苦じゃないのは、たぶん私の性分。

ゲームをやっていた時から図鑑を埋めるのが大好きで、素材は念のためと、とことん集め、全レシピを一度は試さないと気が済まなかった。

そのクセは、こっちの世界に来てから、むしろ加速している気がする。

だって、全てが本物なんだから!!

それに、転生前は採って、加工して、満足して——全てが自己完結の遊びだった。

でも今は、自分の手で作ったものが、確かに誰かの役に立っている。

その実感が、日々の手仕事に小さな使命感と、かけがえのない喜びを灯してくれる。

手を動かすたびに、風の音、土の感触、草の香り——自然の呼吸と自分の心が一つになっていくような、そんな心地よさを感じる。

昨日の滲みのことは少し気になるけれど、私は私にできることをやろう。

「自動販売システムの貼り紙はこれでオッケーね。何かあれば常連さんがハーブガーデンまで呼びに来てくれるでしょう」

今日は収穫に集中しなきゃ。

小さく息をついて、私は麦わら帽子を被ると、ハーブガーデンへと足を踏み出した。

「ガチャ丸く、収穫手伝って〜」

「ギャギャッ！」

お揃いの作業用オーバーオールを着たガチャ丸が、細い腕にむんつと力こぶを作って見せてくる。その仕草がもう、ほんとに可愛くて、思わず笑っちゃう。

でも、可愛いだけじゃなくて——本当に頼もしい存在なのよね。

ゲームの時は、畑仕事はショートカットできたけど、現実の畑はそうはいかない。

朝晩の水やりに、果てしない草抜き。収穫時期ともなれば、重たいかごに山盛りの作物を運ぶのも一苦労。

正直、私一人ではこの畑を維持するのは無理だったと思う。

器用で力持ちなガチャ丸がいてくれるおかげで、今日も畑は元気いっぱい。

こうして一緒に作業できるのが、なんだかとても嬉しいのだ。

そんな風に考えながら、サワサワとハーブガーデンで風にそよぐソー・プラントの葉を、一つひとつ丁寧に摘み取っていく。

ヘラのような形をした肉厚の葉は、指で軽くつまめばプチンと小気味よく茎から外れる。草丈は二十から三十センチほど。茎はしっかり太く、頼りがいのある姿だ。

花の季節には、純白の五枚花弁が一斉に開き、まるで星屑を散らした花束のように庭を彩ってくれる。朝露に濡れたその様子がまた、たまらなく美しい。

このソー・プラントは、うちの暮らしに欠かせない万能植物だ。

葉を揉めば泡立ち、その泡で体も髪も、服も食器も全て洗えてしまう。

お風呂にも洗濯にも台所にも——毎日の生活のあらゆる場面で、しっかり役に立ってくれる。

もちろん、石鹼をちゃんと作ろうと思えば作れるし、対価を払えば錬金釜で完璧な精製石鹼も手に入る。

でもね、私はこの“自然に根ざした感じ”が好きなのだ。

それに石鹼水ってさ、そのまま流していいのか、畑や作物に悪影響はないのかって、色々不安になるじゃない？

でも、葉っぱの汁ならそんな心配もなくていいし、自然由来で使ったあとも土にスツと還ってくれるから、捨てる時の心理的負担もなくてラクなのよ。

ただ、香りはそのままだとほんのり青臭いので、髪や体に使う時は、自家製の精油を少しだけ混ぜるようにしている。

この時期は、清薫花や淡草、紫煙花といった、淡い春らしい香りの花がちょうど見頃。だから、精油もこれらをベースにすることが多いかな。

香り付けの他にも、精油には色んな効果がある。

抗菌、消炎、美白、保湿——乾燥から肌や髪を守ってくれるし、美容効果も高い。

だから、これらの精油で作った軟膏は、うちの店でも人気なのよね。
ソー・プラントの葉を、かごいっぱいになるまでプチプチと手際良く収穫。

そのままインベントリに収納して、次はハーブを採りに行こう。

これから虫に悩まされる季節になるので、虫よけスプレー用にミントは多めに確保しておきたい。
ミントのアロマウォーターはシーツや枕カバー、クッション、衣類に使うと立派なダニ除け薬になる。

それだけでなくミントの染み込んだ布巾やタオルでテーブルや家具を拭くと、それだけで黒くてカサカサ動く悪魔——G^{ジー}が寄り付かなくなる。

香りも爽やかだし、お店を清潔に保てるから、うちでは欠かせないお掃除用具の一つ。

キッチンの拭き掃除にも、床の水拭きにも使えて、使ったあとにふわっと残る自然な香りがなんとも心地いい。

そして、ミント精油は清涼剤にも使える。

そんな感じで、春から夏にかけて大活躍するミントを気温が上がり始めるこの時期に山盛り収穫して、一気に加工・保存しておくのが、毎年の恒例行事。

そんなわけで十分な量のミントを収穫してから、精油用の花も採りに行く。

「ガチャ丸はあっちの花をお願いね」

「ギャツ」

手分けして収穫していく。

花も、本当に使い道が多すぎる。

シロップにしてもいいし、ポーションにも、精油にも、アロマウォーターにもなる。

毎年何かしらが足りなくなつて、あとちょっとあれば……つてなるのも恒例行事みたいになつてる。

そんなことを考えながら、今年も『ティーポットティー』から『ティー』を採取する。

ティーポットティーは名前の通り、まるでティーポットみたいな形をした可愛らしい花。ふつくら丸く膨らんだ花弁の先端は少し傾いていて、まるで注ぎ口みたい。

一枚の花弁が根元で繋がった合弁花で、朝顔とか桔梗なんかと同じ分類。

その内部に溜まった水分のことをティーと呼ぶのだけれど、これ、実は全然お茶の味はしないの。

無色透明で、ほんのり甘いような気がするかな？ くらいの『ほぼ水』が、だいたい三百ミリリットルくらい溜まっているのだ。

毒性はなく、そのまま飲んでも平気で、煮沸の必要もない。

昔から、野外活動をする冒険者や行商人たちの間では水分補給に重宝されてきたけれど、そう

いった経験がない人にはあまり知られていない、ちよつとマイナーな野草だ。生育域が広いから、ほとんどの野山で見つけられる。

それゆえに雑草扱いされているんだよね。わざわざ育てる人なんて、たぶんあんまりいない。でも、私はこのティーポットティーを、あえて畑で育ててるの。

理由はとつてもシンプルで、ティーをポーションのベースに使うと、びっくりするくらい品質が上がるから。

しかも、防腐効果も高くなって、出来上がったポーションがすごく長持ちするのよね。

ただ、これは実はあんまり知られていない。

薬師ならみんな知ってることなのかな？ って最初は思ってたんだけど、意外とそうでもなかったんだよね。

というのも、ポーションって普通は『浄化水』や『聖水』みたいな高級素材で作るのが当たり前ってというのが、この世界の常識らしくて……

冷静に考えてみたら、そりやそうなのよ。

病や怪我を治す神聖な魔法薬に、そこらの雑草から抽出した水なんて使ったら、下手すれば『異教徒！』とか『冒険者！』とかつて、吊るし上げられてもおかしくないわけ。

でも、できちゃったんだよね……。

だって、目の前に素材があったら試してみたくなるじゃん？

しかも、雑草レベルのレアリティだしさ、そんなの気軽に使っちゃうよ。

とはいえ、まさかそれで聖水と肩を並べる効果が出ちゃうとは、私も思わなかった。

ま、売らなければセーフってことで。

正確には『薬師ギルドに所属してないから売れない』が正しいんだけどさ。

でも、かえって所属していなくて良かったかも？

もしバレたら絶対大事になるやつでしょ、これ。

薬師ギルドってちよつと『インテリと権威の象徴』感が強くて、格式とか伝統とかに厳しいんだよね。

ポーション一つ作るにしても『どこそこの名家の薬師が定めた手順』とか『流派』とか、ちゃんと踏襲しないといけないし。

それだけ、誇りと歴史があるってことなんだろうけど、正直、あのプライドの高さは私みたいに雑草から魔法薬作るタイプにはしんどい。

素材を見つけたら即実験、ダメだったら次！ っていう、私のやり方とは相性最悪なのよね。

だから、たとえば販売はできなくても、自分のペースで自由に作れる今の方がずっと性に合っている。